

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 白春花

本研究は、主要部後置言語で、関係節が複数の被修飾名詞句候補に先行する際の処理偏向について、複数の言語にわたっての母語話者の処理偏向および、第二言語および第三言語として日本語を読む際の処理偏向について、複数の手法を用いて調べたものである。

まず、最終的な処理結果を探るべく行われた質問紙調査においては、日本語、中国語（北京語）、トルコ語、モンゴル語といった複数の言語の母語話者を対象に、これらのすべての言語の間で共通した（つまり同内容の文がそれぞれの言語に訳された）言語素材を用い、共通の手法で四言語間比較調査を行った。この結果、中国語とトルコ語においては、構造的により低い位置の名詞句を関係節主要部として解釈する偏向が確認された一方、日本語とモンゴル語においては、入力順序としては後となる、構造的により高い名詞句を関係節主要部と解釈する傾向が確認された。

この結果に基づき、日本語を第二言語とする中国語母語話者、また日本語を第三言語、中国語を第二言語とするモンゴル語母語話者について、日本語における処理偏向を探る調査を行い、外国語としての日本語の処理においては、母語の処理偏向および、既習外国語における処理のあり方が一定の影響を及ぼすことが示された。

次に、文理解処理の最中の解析器の振る舞いに迫るべく行われたセルフペースト読み時間計測実験および脳波測定実験において、日本語の関係節処理においては、母語の処理であれ第二言語の処理であれ、局所的な理解の保持が優先される傾向があること、また多義性が収束しないままの全体的曖昧文が、これまでの先行研究で想定されていたより高い負荷に結びつくことが示唆された。

論文審査の場においては、オンライン手法の一連の実験において、仮説構築の前提としていたいくつかの点と異なる結果が得られたこと、またそうした点と、先行研究で得られた知見との整合性について、理論的な検討が不十分に終わっている点が複数の審査員から指摘されている。こうした点は白氏自身にとっての今後の改善点として認識されると同時に、第二言語、第三言語における、実時間的手法での言語処理実験を行う際の困難さ、今後の分野全体としての課題が小さなものでないことを浮き彫りにしているといえよう。

しかしながら、主要部後置言語を対象にした当該構文の母語話者のデータは日本語、中国語といった心理言語学研究者人口の比較的多い言語では一定の先行研究があるもののトルコ語、モンゴル語ではまだ処理偏向の方向性自体が確かめられていない中、方法を統制して四言語を調査したこと自体、さらにそのうち三言語については、オンライン手法での実験データを行ったことも含め、白氏は極めて有益なデータを提供したと認められる。さらに、こうして確認された、母語の処理偏向における言語間相違に基づき、第二言語話者、さらに第三言語話者の処理のあり方について、これまでの第二言語処理研究や、数少ない第三言語処理研究の先行研究から得られた知見をもとに予測をたて、実際にそのような特定の言語背景を持った話者層を対象とした調査を実現させたということ自体、分野にとって極めて貴重な資料面での貢献をしたと評価できる。

以上のことから、本審査委員会は、白春花氏に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。